

日本語教育史(3)

江戸時代の外国人日本語学習者

高見澤 孟

第三章 オランダとロシアの日本語研究

徳川幕府は、17世紀に入ると、キリスト教に対する禁制を徐々に強め、1613年にはキリスト教を全面的に禁止し、当時イエズス会から日本に派遣されていた250名に及ぶ宣教師を海外に追放したが、1616年の伴天連宗門御制禁奉書によって中国船を除く外国船の来航を平戸と長崎に限定し、通商を許可していた。当初は、ポルトガル、イギリス、オランダとの交易が行われていたが、1639年に第5次鎖国令が施行され、オランダ人以外の西洋人の渡航が禁止され、さらに1641年にオランダ商館が長崎の出島に移転され、鎖国制度が完成した。

オランダ商館員たちは、幕府の政策で日本人との接触を制限され、日本語の学習も禁止されていたため、日本語に対する関心はそれ程高いものではなく、エキゾチックな日本の文物に対する興味に止まっていたようである。出島の商館のオランダ人の日本語研究が盛んになるのは19世紀になってからである。

他方、ロシアは17世紀には不凍港を求める南下政策の一環としてシベリアから太平洋への進出を図り、日本に対する関心も高まり、国策として日本語教育も重視されていた。

3-1 漂流民の日本語教師

帝政ロシアは、17世紀にはシベリア開発を推進し、北太平洋にまで進出してきていたが、太平洋での航行に必要な食料や薪水の補給基地、緊急時の避難港として日本の重要性を認識していた。鎖国政策の徳川幕府との交渉は、困難であったこともあって、日本語教育はたまたま漂着した日本人を教師として採用するという特異な方法が採られていた。

3-1-1 ロシア最初の日本語教師

記録に残る最初の教師は、大阪の商人、デンベイ（伝兵衛）であった。デンベイも1695年に大阪から江戸へ向かう航海中に嵐に遭い、6ヶ月漂流した後、一行12名とともにカムチャッカに漂着したのであったが、カムチャッカ地方調査中のロシアの探検家ウラジミール・アトラースフに救出され、当時のシベリア開発の中心地、イルクーツクに送られ、さらに1702年にはモスクワでピョートル大帝に拝謁して、日本語教師に任命されたのであった。デンベイはロシア語を学習した後、1705年にペテルスブルグに創設された元老院附属日本語学校に赴任し、ロシアでの公的な日本語教育が開始されたという。（以下、3-1は関正昭著『日本語教育史研究序説』、木村宗男編『講座日本語と日本語教育第5巻日本語教育の歴史』に拠るところが大きい。）

3-1-2 ロシア最初の日本語学習書

1710年にも日本船のカムチャッカへの漂着があり、乗組員の一人、サニマが選ばれて、ペテルスブルグに送られてデンベイの助手を務めることになった。さらに、1728年には薩摩の商船若潮丸がカムチャッカに漂着し、水夫17名の内、15名は原住民に殺害されたが、生き残った35歳のソーザ（宗佐?）と11歳のゴンザ（権佐?）はペテルスブルグに送られて、女帝アンナ・ヨアノヴナに拝謁し、同地に滞在した。二人は後に洗礼を受けてロシア正教徒となり、ペテルスブルグ科学アカデミー附属日本語学校の教師に任命されたが、年若のゴンザは特にロシア語が堪能で、日本語指導にも優れていた。

ゴンザとソーザは、日本語の知識のあった上司の科学アカデミー司書、アンドレイ・ボグダーノフと協力して各種の日本語学習書を編纂した。

- ・『露日語彙集』（1736年、アルファベット順索引）
- ・『日本語会話入門』（1736年）
- ・『簡略日本文法』（1738年）
- ・『新スラブ日本語辞典』（1736～1738年）
- ・『友好会話手本集』（1739年）（木村著前掲書 p.17）

わずか3年のうちに2冊の辞典と1冊の文法書、2冊の会話テキストを完成したことは、当時のロシアがいかに日本への関心が強く、そのための努力を傾注していたかが窺われるし、基本的な言語学的知識が豊富とはいえないゴンザやソーザを指導してこれだけの学習書を編纂したボグダーノフの手腕も並み大抵なものでなかったことが推測できる。

この後も、1744年に南部藩の佐井港の竹内徳兵衛の持ち船、多賀丸が難破し、オンネコタン島に漂着し、一行10名のうち、5名がペテルスブルグに送られてロシア語を学んだ後、1753年にイルクーツクに移され、航海学校附属日本語学校と改称されていた日本語学校の教師として赴任した。そこでは、ロシア人学習者や漂流民の子供たちにも日本語を教えていた。この漂流民の日本語教師、三之助と現地ロシア人との間に生まれた子供のアンドレイ・タターリノフは、そのバイリンガルの才能を活かして1782年に日本語をロシア文字と平仮名で表記した『露日対訳辞典レキシコン』を作成した。これには、977語のロシア語をアルファベット順に収録し、それぞれに日本語訳をつけ、さらに会話文50例も付記されていた。

3-1-3 大黒屋光太夫一行の貢献

1782年に伊勢白子の神昌丸がアリューシャン列島のアムチートカ島に漂着したが、生存者は船長の大黒屋光太夫他、4名であった。一行はペテルスブルグでエカテリーナ女帝に拝謁し、同地に滞在していたが、この間に光太夫は、エカテリーナ二世の命でP・S・パルラス（P. S. Pallas）が編纂していた『欽定全世界言語比較辞典』の日本語部の改訂に協力した。光太夫は、8年の滞在后、ロシア使節、A・K・ラクスマン（A. K. Laksman）に伴われて帰国したが、一行のショウゾウ（庄蔵）とシンゾウ（新蔵）は、帰国を諦め帰化して、1791年に勅令によりイルクーツクの日本語学校教官を拝命した。ショウゾウは、5年後に死去したが、シンゾウは、現地の女性と結婚し、ロシア名をN. P. コロチギン（Kolotyghin）と名乗り、20年間にわたって教師を務めたという。シンゾウについては、後に漂着した若宮丸の見聞録（大槻玄沢編『環海異聞』）に次のように記述されている。

新蔵が今の名はニコライ・ハイトルイチ・コロテゲノと申候。日本文字師匠の役相つとめ、土地の学問所へ日々出勤、日本字手習の師匠いたし申候。当時童子弟子六人これ有り候。。。。新蔵が日本字はいろはより仮名書位は出来候様子に御座候へども、オロシア言葉並びによみ書のことよく覚え候趣にて、入組の掛合事、又は官辺の願書、其外の書物等を、彼方の文法の事なれば、自然に認取候様子也。(木村著前掲書 pp.18~19)

つまり、若宮丸の乗組員の見るところ、新蔵は日本文字の教師として勤務していて、仮名文字を教えている様子であるが、ロシア語は会話も読み書きもよく学び、さらに訴訟の交渉や官庁への願書やその他の書類の作成なども自然に習得しているように見えたということである。

3-1-4 世界を一周した日本人

1793年11月に石巻から江戸へ向けて出港した若宮丸は、暴風に遭い漂流して、アリューシャン列島のアンドレヤノフスキー島に漂着し、船頭の津太夫以下16人の乗組員は同島に駐在していたロシア人官憲に助けられて、イルクーツクに送られ、同地に滞在することになったが、すでにその地の日本語学校で教鞭をとっていた新蔵ら伊勢からの漂流民の世話を受け、日本語教師の助手になった者もいた。10年後、アレクサンドル皇帝が日本との通商を図る使節団を派遣することにし、在留漂流民を同行させることになり、帰国を希望する4名がペテルスブルグに呼ばれ、皇帝に謁見の上、使節レザノフ(N. P. Rezanov)に伴われて、帰国の途についた。

1803年の6月にペテルスブルグを出発した使節団一行は、大西洋を渡り、南米大陸の南端、マゼラン海峡を経て太平洋に入り、北上してオホーツク海のペトロパブロフスクに寄港して、日本との交渉の準備を整え、1804年9月に長崎に到着した。その間の航海の様子や寄港した各地の状況は、前述の『環海異聞』に詳しいが、それによると、使節のレザノフは、航海中乗船している日本人から日本語を学び、3500語におよぶ『日露辞書』を作成したという。

11年ぶりに帰国した4人の日本人は、すぐには帰郷が許されず、鎖国令に違反したという理由で長期にわたって長崎で幽閉され、日本人最初の世界一周の経験は周囲の人たちには伝えられなかったという。(注: これら若宮丸の人々については、現在においても十分に明らかにされているわけではないが、2001年に地元石巻の有志を中心に設立された「石巻若宮丸漂流民の会」の人たちが専門家の協力を得て、精力的に研究を進めているので、近い将来さらにその実像が明らかになるものと期待している。)

3-1-5 方言を伝えるロシアの日本語教材

漂流民を教師として発足したロシアの日本語教育は、漂流民の方言をそのまま教材化することが多く、当時の日本の方言がロシア式のアルファベットで記録されているので、日本語の変遷を研究する資料として貴重である。主な教材の開発に関わった漂流民とその出身地の方言を以下に整理する。

漂流時期	教材開発者	教材名	開発者の方言
1695年	デンベイ	不詳	大阪弁
1711年	サンエモン	不詳	津軽弁?
1736年	ゴンザ	『日本語会話入門』『簡略日本文法』他	薩摩弁
1744年	久助	不詳	南部弁

1782年	大黒屋光太夫	『欽定全世界言語比較辞典』(改訂)	伊勢弁
1793年	太一郎	『日露辞書』(協力)	石巻弁

このように漂流民の出身地が多岐にわたり、しかも船員や漁師、商人等が多かったために、その語彙や表現も方言的なものが多く、日本人漂流民の間でも意見が分かれることが多く、後任教師が先任教師の教材を誤りとして自分の方言風に訂正してしまったり、ロシア語の知識不足から誤訳が行われることも少なくなかった。ゴンザの『露日語彙集』でも、ロシア語の「伯爵夫人」の訳語として「おふくろ」が当てられたり、「青春」に相当するロシア語を「ワカカコト」と訳したりした例もあると指摘されている。

漂流民の中では、最も教養があったと考えられる大黒屋光太夫なども、出身の伊勢地方の方言を基準に南部弁や薩摩弁を誤りとして訂正していたこともある。また、これらの漂流民から日本語を学んだロシア人通詞(=通訳)の日本語が幕府の役人には理解できず、交渉に支障をきたすこともあったという。

【参考】

村山七郎氏の『漂流民の言語』(1965年 吉川弘文館)の分析に基づいて関正昭氏(1997年)が例示した、日本語教材に現れた方言の一部を紹介する。

<ゴンザの薩摩方言の特徴> (音表記は、筆者がカタカナ書きに変更)

- ① 音節「シ」に続くラ行音がタ行音に転化する。
知らない → シタン 柱 → ファシタ
- ② 「テ」が「チェ」, 「デ」が「ジェ」に転化する。
手 → チェ 着て → キジェ
- ③ 語中の「リ」「レ」の頭子音が弱まっている。
針 → ファリ 割れ目 → ワジェメ
- ④ 若干の単語において濁音化が見られる。
畑 → ファダケ 従兄 → イトゴ
- ⑤ 語末音節の母音は弱まっているが、「促音化」はみられない。
首 → クブ (kub) 取る → トル (tor)

<サスケの陸奥方言の特徴>

- ① 母音の「エ」と「イ」の交替例
マエダレ(前垂) → マイダレ オマエ → オマイ
- ② 「ヒ」と「フ」の混用
ヒトツ → フトツ フナカタ(船方) → ヒナカタ
- ③ 濁音の前の母音が鼻音化する。
手袋 → tembuguro 伯母 → umba
- ④ 語中の「カ行音」や「タ行音」の子音が有声化する。
仏 → ホドゲ 兄(をやかた) → オジャガダ (関著前掲書 pp.235-237)

これらの方言を含む日本語教材で方言話者から日本語を学習したロシアの使節や通訳の日本語が幕府の役人に通じにくかったことは想像に難くない。

3-2 オランダ人の日本語研究

オランダは、鎖国時代に交易を認められ、長崎の出島という限られた地域であったにしる商館の設置が許可されていただけに、江戸初期においては禁令になっていた日本語の学習は行わず、その商館長たる甲比丹（カピタン）は専ら中国人や日本人の通詞を通して交渉を行っていたという。日本への関心は、商館の医師として赴任してきたドイツ人たちの方が旺盛であった。それらの医師の中でも、1690年来日したケンペルや1775年に赴任してきたツェンペリー、1823年のシーボルトなどが特に熱心であった。商館関係者のオランダ人の日本語研究は、19世紀に入ってからH・ドーフ（H. Doeff, 1777~1835）やJ・F・ファン・フィッセル（J. F. V. Fisscher, 1800~48）があげられる。

3-2-1 モンタヌスの『日本誌』

1641年の鎖国令の完全実施に伴い、西洋人で日本に入国できるのはオランダ商館員だけに限られることになったが、幕府の日本語学習についての禁止令もあって、当初、オランダ人は、日本語学習にきわめて消極的であったと見られる。ただ、現実合法的に接触している唯一の国であったので、日本の国情、文化、社会などに対する関心は高く、1669年には、訪日経験のないモンタヌス（A. Montanus）がオランダ使節や商館員の見聞録、さらにイエズス会宣教師たちの報告書などをまとめて刊行した『日本誌』（*Atlas Japannesis*）は、当時のヨーロッパにとって未知の国であった日本を挿絵入りで紹介した初めての出版物であったので、広範囲にわたる関心を呼び、翌年には英語、フランス語、ドイツ語に翻訳され、各地で出版されることになった。

モンタヌスは、文書類の研究によって同書を著したので、詳細な点では間違いや誤解もあるが、日本の言語については次のように記述している。（以下、3-2は杉本つとむ著『西洋人の日本語研究』に拠るところが大きい。）

日本人は一つの共通言語を有すれども、発音は種々に別れ、数個の特殊の方言を有するが如く認めらる。彼等は吾人の如くに実名詞に形容詞を添ふることをせず、数種の詞によりてある事を善しとし悪しとしまたは善悪無しと了解し、又其他に及ぶ。しかのみならず、言語に数種の調子または語勢あり、我が音楽の調子の如くあるいは鋭くあるいは平にして、これによりて意味を区別す。しかれども君主は威厳ある態度をもって傲慢なる言語を使用し、平民は数等低き風体にて語る。簡短に言へば男女は同一の語法を用ひず、かつまた文章の体も日常の俗語とは異り…（杉本著前掲書 p.230）

この記述から当時のヨーロッパでは、日本語の①各種方言の存在、②語順や文法構造の違い、③待遇表現の使い分け、④男女語の違い、⑤口語体と文語体の違いなどが確認されていたことがわかる。

3-2-2 ケンペルの日本語研究

ケンペル（E. Kämpfer, 漢字表記、堅不留）は、1690年にオランダ商館医師として来日したドイツ人医師であったが、科学者の眼で日本や日本人を観察し、任期満了後、日本の図書50冊をはじめ、生活用具60点、動植物の標本多数を持ち帰っている。彼の業績の一つは、日本の絵入り百科事典、博物誌とも言うべき『訓蒙図彙』等を参照し、1712年に『廻国奇観』を刊行したことである。その死後の1727年には、研究の集大成として『日本誌』（*The Japanese History*）が刊行された。

その中で、ケンペルは日本語や日本人の性格や起源について次のような見解を明らかにしている。

一般的に言って、日本語の発音は、純粹で、明確で、音節を一つ一つはっきり分けて発音する。一音節は、われわれのアルファベットで示せば二単音か三単音の集りで、それ以上のことは、ほとんどない。しかしそれに反しシナ語では多くの子音がまじり合い、一種の歌の調子をもって発音され、耳に快いものではない。文字においても両者は異なる。風俗習慣、生活様式などにおいて日本とシナとは非常にちがっているし、心の用い方においても両国民は大いなる相違があつて、シナ人は平和愛好であるのに、日本人は好戦的である。(杉本著前掲書 p.240)

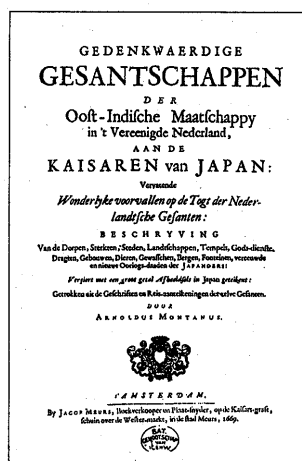
日本語の発音については、日本語の拍や音節構造の特徴をよくとらえて解説しているし、中国語の音節構造や四声なども彼なりの見解が述べられている。日本人と中国人の国民性については江戸幕府初期の時代的雰囲気もあつてのことと考えられる。日本人の起源については、ケンペルは次のような大胆な推論を展開している。

原始の世界にさかのぼって、日本人はバビロンの最初の民の子孫であり、その国語は神が刑罰と混乱の方法をもって、バビロンの塔の無益な構築者たちの心に吹きこんでかきまわした原始の言語の一つであることを断言しよう。彼らがどのようにして日本へいったのか。何時自分たちの最初の大旅行を敢行したのか、つぎのことがもっともありうる推測のように思われる。(杉本著前掲書 p.240)

この後、ケンペルは、日本人の大旅行のコースを次のように解説している。「原始日本人が西アジア、チグリス・ユーフラティスの二つの河の流域から日本に向かい、アジアの東海岸、朝鮮半島に出て、中国地方（長門付近）に渡来してきたと考える」としているが、その根拠は明らかではない。

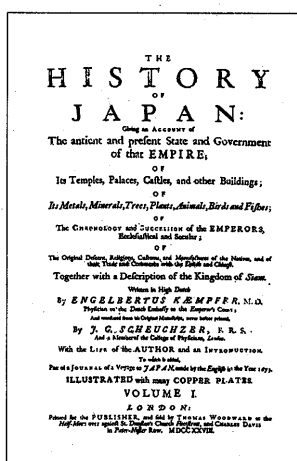
参考資料 1

『日本誌』挿絵



モンタヌス『日本誌』

タイトルページ



ケンペル『日本誌』（英語版）

タイトルページ

『西洋人の日本語研究』

杉本つとむ 著 八坂書房

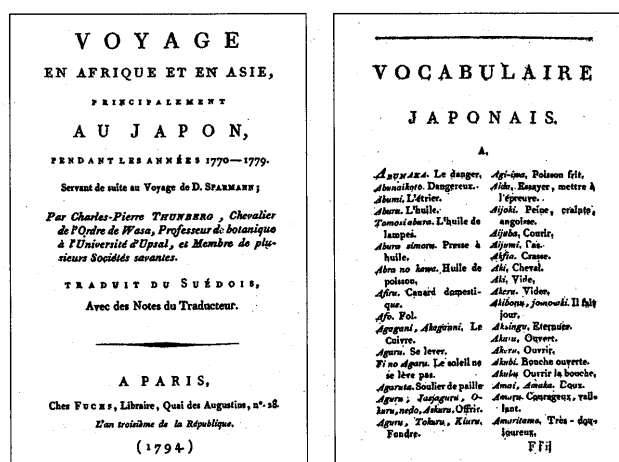
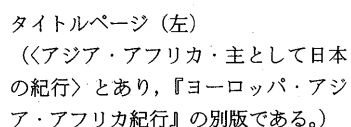
1999年より。以下参考資料の出典は同書に拠る。）

3-2-3 ツェンペリーの日本語研究

ケンペルに遅れること84年、スウェーデン人のツェンペリー（C. P. Thunberg）は、1774年にオランダ商館付き医師として来日した。ツェンペリーは、植物採集に熱心であったが、言語にも関心が高く、

ツェンペリーは、幕府の禁令を犯して、知り合いの日本人通詞（姓名は記録されていない）から日本語を学習したので、その語彙集の「前書き」には、日本語について次のような見解を述べている。

参考資料 2
『語彙集』挿絵



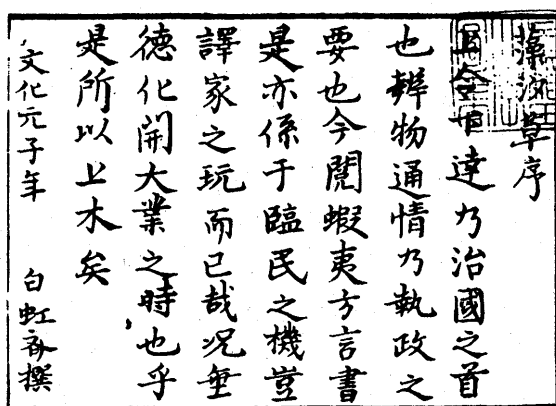
ドイツ人のシーボルト（J. P. Franz Balthasar von Siebold, 1796～1866）は、1823年にオランダ商館付き医師として来日し、6年間滞在したが、その間に日本人蘭学医たちを鳴滝塾において指導して、高野長英、伊東玄朴など有能な弟子を育て日本の蘭方医学の発展に貢献した。そのかわり、日本語を学び、さらに日本の文物を広範囲にわたって収集し、ヨーロッパの日本研究促進に大きな役割を果たしたといえる。現在でもオランダのライデン大学図書館や国立民族学博物館に膨大なシーボルト・コレクションが陳列されている。

シーボルトは、1829年に国禁の書を海外へ持ち出すことを企てたとして、長崎から追放されたが、滞在中に日本人や中国人の学者の助けも借り、以下のような日本語関係の論文や著書を発表している。

—(8)—

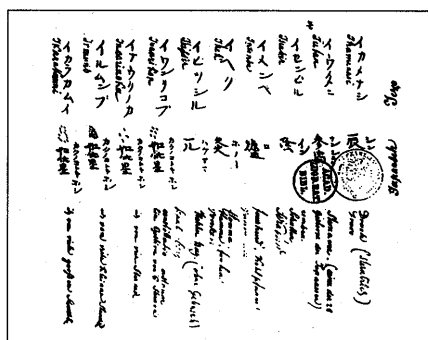
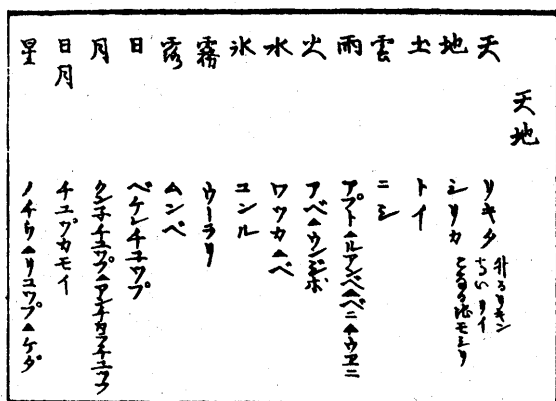
- ・『日本語字彙』（語彙集・全200ページ）1828年
- ・『日本書籍目録』（書誌学的研究）1835年～1841年

シーボルトの研究の特徴は、広範囲の研究分野と多くの協力者を得ていたことにある。『日本語字彙』では、蘭学者や蘭通詞の轟武七郎、岡研介、吉雄忠次郎、吉雄権之助の協力によるとされているし、『日本書籍目録』は、後にライデン大学で最初の日本語学教授になったホフマンとの共著であり、中国人の郭成章の協力が大きかったと記録されている。また、アイヌ語の研究では、著書の『Nippon／日本』でも日本語との比較をしているが、それには上原熊次郎の『藻汐草』（1804年）を援用していることも知られている。



参考資料 3

『藻汐集』挿絵（左上・序，左下・本文冒頭）
『蝦日独語集』挿絵（右下）



医学指導や植物学研究に比べシーボルトの日本語研究はやや精彩を欠くが、オペラ歌手を目指していたホフマンを日本語教育に誘い、その才能を充分に発揮する機会を与えたことは大きな功績である。ホフマンの日本語研究については、次章で詳説する。

第三章 参考文献

- 関 正昭著 『日本語教育史研究序説』 スリーエーネットワーク 1997年
木村宗男編 『講座日本語と日本語教育第5巻日本語教育の歴史』 明治書院 1991年
杉本つとむ著 『西洋人の日本語研究』 八坂書房 1999年
平凡社編 『世界百科事典三十一巻』 平凡社 1958年
大島幹雄 「四人の漂流民が見た異国」 日本経済新聞（12/29, 2004）文化欄記事

（たかみざわ はじめ 日本語日本文学科）